

1. 評価報告概要表

作成日 平成19年 10月27日

[評価実施概要]

事業所番号	097130017
法人名	医療法人 渡部医院
事業所名	グループホーム和
所在地	栃木県那須塩原市大原間72-1 (電 話) 0287-65-5753
評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成19年 9月 14日

[情報提供票より] (平成19年 8月 31日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 17 年 3 月 1 日			
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18	人
職員数	7 人	常勤 6 人, 非常勤 1 人, 常勤換算	6.87	人
	7 人	常勤 7 人, 非常勤 0 人, 常勤換算	7.0	人

(2) 建物概要

建物構造	木造造り
	平屋建ての 1階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	26,000 円	その他の経費(月額)	24,000 円
敷 金	有 (円) ○無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有 (円) ○無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1000 円		

(4) 利用者の概要 (8月 31日現在)

利用者人数	18 名	男性	4 名	女性	14 名
要介護1	5 名	要介護2	4 名		
要介護3	8 名	要介護4	0 名		
要介護5	1 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 81.83 歳	最低 69 歳	最高 91 歳		

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	渡部医院、江口歯科医院
---------	-------------

[外部評価で確認されたこの事業所の特徴]

事業所理念「昔ながらの生活、個人の尊厳、創造性豊かな生活」を基に2つのユニット(春夏、秋冬)それぞれが、職員話し合いの中からより具体的な表現の理念を作り上げた。秋冬は「一人ひとりの、うれしい、楽しい、おいしいを大切にするケア」「寄り添う癒しのケア」、春夏は「自立が尊重される暮らし」「一人ひとりの生きがいの実現」である。入居者一人ひとりの生活感、価値感を職員全員が把握し、そこから得られた多面的な情報が介護計画に活かされている。小旅行、親族の葬儀や法事への参列、お墓参りなどの外出支援は、入居者と共に喜び、共に感動し、入居者の孤独感に共感する寄り添うケアであり、職員の深い理解が入居者の満足に繋がっている。管理者の話す「認知症に視点を当てるのではなく、個人に視点を当てるケア」が実践されている。入居者の自由な暮らしを支えていくうえでも、ホームが隣組の一員として地域と積極的に交流を深めていくことが課題である。

重点項目	①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4) この1年、改善課題として取り組んだ内容は、①金銭の自己管理の検討、②見当識を支援するためのカレンダーや時計の配置、③職員全員で関わるサービスマニュアル等の作成整備、④災害マニュアルの見直しと災害備蓄の整備、⑤見学時のパンフレットの作成、⑥職員のメンタルヘルス、⑦集団外出から個人外出支援への転換などである。このうち、⑥と⑦は、引き続き取り組み課題としてさらなる努力が求められる。
	②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4) 毎年、職員一人ひとりが自己評価をすることによって、サービスの質の向上に向けた意識付けができています。外部評価が報告された後は、内容を全体会議で検討し改善に向け具体的な取り組みを行っている。今後は、自己評価の際に家族の意見も聴取し反映させたいと考えている。
重点項目	③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6) 運営推進会議の回数は少ないが、ホームの理念や取り組みについて、家族や地域住民、市当局の理解を得るためのテーマを設けている。今年度は「災害対策、緊急時の対応」「地域の活動、徘徊SOSネットワーク作り」等のテーマを設定し、参加する職員も増えていることからサービスの向上に活かすことが期待される。市の担当者が会議に毎回参加し、情報の交換を行っているが、頻繁な接触はない。市主催による「介護予防推進員養成講座」でホームの管理者が認知症についての講義をすることになっている。
	④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8) 季節ごとに「和(なごみ)便り」を発行し、ホームの様子や入居者の暮らしぶり、行事の予定、職員の異動、地域の様子などを家族・関係者に知らせている。運営推進会議の他、苦情受け付け箱の設置や相談窓口担当者の配置、重要事項説明書での外部相談窓口の紹介、苦情受け付けから解決までの手順の整備など、仕組みを整えている。家族が普段から意見や苦情を言いやすいような信頼関係を築くことを大切にしている。
重点項目	⑤	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3) 建物が併設施設の陰に位置しているため、近隣住民の立ち寄りはい少ないが、ボランティアの訪問が増えている。入居者が公民館の講座を利用することや地域の敬老会に招かれること、祭りに参加すること以外は、事業所として地域に関わる事が少ない。自治会や公民館の行事にも参加したいとの意向があり模索中である。認知症への理解を地域に広げ、離脱事故、災害時などに住民の協力を得るためにも、今後、地域と関わりを深めることが求められる。
	⑥	

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
1. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	事業所の理念として「昔ながらの生活、個人の尊厳、創造性豊かな生活」を大切にすることを掲げ、運営をしてきたが、この度、職員総意のもとに事業所の理念をより具体的に表したユニットそれぞれの理念を作り上げた。春夏ユニットの理念は「自立が尊重される暮らし」「一人ひとりの生きがいの実現」であり、秋冬ユニットは「一人ひとりの、嬉しい、楽しい、おいしいを大切にするケア」「寄り添う癒しのケア」である。		理念には「地域の中で暮らしていく」という地域密着型サービスの本質を表現した言葉が足りないとの認識を持っている。入居者のほとんどが、以前に暮らしていた地域とは別の場所に住んでいることになるので、理念の再構築とともに、グループホームが存立している地域との関係をどう築くか、今後の積極的な取り組みが期待される。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	事業所の理念はホーム内各所に掲げられ、職員の名札の裏面に記載することによって、いつも振り返りが行われて職員間に共有されている。また、ユニット独自の理念は、職員の話し合いの中から作られたものであり、より具体的な表現となっている点、日頃のサービスに活かされやすい。		職員の入れ替わりがあることから、理念の具体的な実現に向けて、常に職員間の共通認識を図る取り組みが求められる。
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	事業所の建物が、併設施設の陰の奥まったところに位置しているために、普段の近隣住民の訪問は少ないが、ボランティアの訪問などが徐々に増えている。入居者が地域の公民館の講座などを利用することや地域の敬老会に招かれること、祭りに参加すること以外は、事業所として地域に関わることが少ない。	○	さまざまな機会を通して、地域住民や市民にグループホームの存在や認知症のケアを理解してもらえるような、積極的な取り組みが望まれる。
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	毎年、職員一人ひとりが自己評価をすることによって、サービスの質の向上に向けた意識付けができています。外部評価が報告された後は、内容を全体会議で検討し改善に向け具体的な取り組みを行っている。今後は評価項目それぞれについて家族からも意見を聴取したいとしている。		この1年、改善課題として取り組んだ内容は、①金銭の自己管理の検討、②見当識を支援するためのカレンダーや時計の配置、③職員全員で関わるサービスマニュアル等の作成整備、④災害マニュアルの見直しと災害備蓄の整備、⑤見学時のパンフレットの作成、⑥職員のメンタルヘルス、⑦集団外出から個人外出支援への転換、などである。このうち、⑥と⑦は、引き続き取り組み課題としてさらなる努力が求められる。
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の開催回数はまだ少ないものの、ホームの理念や取り組みについて、家族や地域住民、市当局の理解を得るためにテーマを設け話し合う機会としている。外部評価の意義や評価を受けた後の改善への取り組みについても伝えている。今年度のテーマとしては「災害対策、緊急時の対応」「地域の活動、徘徊SOSネットワーク作り」などが設定され、会議に参加する職員も増えており、サービスの向上に活かすことが期待されている。	○	運営推進会議についての課題は、開催の定期化と参加家族の増加である。より多くの家族の意見を運営に反映させるために、参加できない家族への誘いかけと、遠方に在住する家族の意見聴取が求められている。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市の担当者が運営推進会議に毎回参加し、市からの情報を伝えたり、ホームは現状を知ってもらったりしているが、頻繁な接触はない。今回初めて市主催による「介護予防推進員養成講座」が開催されることになり、ホーム管理者が講師として認知症についての講義をすることになった。	○	困難事例などの情報を市と共有して対策に取り組んでいるが、さらに、市全体のサービスの質が向上するために、市と連携して情報の提供・交換、研修などに取り組むことが期待される。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	季節ごとに「和(なごみ)便り」を発行し、ホームの様子や入居者の暮らしぶり、行事の予定、職員の異動、地域の様子などを家族・関係者に知らせている。入居者それぞれの様子については、家族が面会や通院介助に來たおりに知らせており、必要に応じて電話連絡やメールの交換をしている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	直接意見を表明できる運営推進会議の他、苦情受け付け箱の設置や相談窓口担当者の配置、重要事項説明書での外部相談窓口の紹介、苦情受け付けから解決までの手順の整備など、仕組みを整えている。何よりも、家族が普段から意見や苦情を言いやすいような信頼関係を築くことが大切にされている。		ホームの暮らしが集団のケアから個別支援に移っている点などを家族関係者によく理解してもらい、その人らしい暮らしの実現へ向けて家族の協力を得やすくしたいとしている。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	馴染みの関係を保つために、職員の異動はほとんど無いが、離職率が高く職員の入れ替わりが多い。入居者へのダメージを少なくするために、職員が退職するときには必ずお別れ会を催して、入居者に職員が辞めることを理解・納得してもらうようにしている。職員の負担は大きくなるものの、ケアはチームの連携で行われているために、サービスの低下につながらないよう配慮している。	○	全国グループホーム協会でも離職についてのアンケートを実施しているので、積極的に協力し、体制や報酬等も検討していきたいとしている。
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人、事業所は、有用な研修にはできるだけ職員を参加させる方針をとっている。全職員が認知症介護実践研修を受講することができるように、毎年数名ずつ参加させている。また、今年11月より、認知症介護指導者養成研修にも1名が参加を予定しており、順次、より高いレベルの研修への派遣を計画している。職員も事業所の研修機会の充実に期待を寄せている。		管理者は、職員の定着へ向けて、職員の新入時から計画的に研修を積むことが出来るように教育計画を作成したいとしている。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ユニットの計画作成担当者であるユニット長が、毎月、市のケアマネージャー連絡協議会に参加し、同業者との交流を通して情報交換や連携を図っている。しかし、グループホーム同士の交流や勉強会などは実施していない。		職員には、他のグループホームでの取り組みや悩みを共有することにより、自分のホームのサービスや運営に生かしたいとの希望があり、管理者はサービスの質の向上に効果や意義のある、交流を望んでいる。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	管理者などが事前に相談を受けたり、家庭に向いて聞き取りを行うなどして情報を得た上で、入居予定者・家族にはホームの設備や居室を見学してもらい、納得して入居に移るよう支援している。場合によっては、家族と一緒に泊まることもあり、自宅で使っていた家具を持ち込んでもらって、なるべく自宅にいるのと同じように落ち着いて過ごせるよう配慮している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	秋冬ユニットの理念「一人ひとりの、うれしい、楽しい、おいしいを大切にできるケア」および春夏ユニットの理念「一人ひとりの生きがいの実現」にある通り、入居者ができること、得意なことを中心に生活が進められており、その中で、介護者も共に生活する者として、教え合い、学び合い、助け合うことを日々実践している。例えば、入居者からは調理の仕方や煮物の味付けを教わり、将棋を指すときには真剣勝負をして、勝ち負けで入居者とともに一喜一憂している。		入居者の社会生活を支えるために、近親者の葬儀に参列することを支援しており、人との濃密な関係や信仰について、職員が学ぶことが多いとして、職員教育のために今後もこのような機会を大切にしたいと考えている。
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントツールとして「センター方式」を採用しており、職員の観察とともに、本人や家族からの聞き取り、普段の会話などから意向の把握に努めている。直接の聞き取りが困難な場合でも、いろいろな場面を通して、入居者一人ひとりの意向や価値観の把握につとめている。例えば、以前住んでいた地域の祭りに参加したときに、入居者の知合いから話が聞けて情報が得られたこともある。		生活の幅を広げることが、より一層入居者の昔の姿を浮かび上がらせることになり、サービスの質の向上につながる役割を果たすので、今後も個別支援を充実させていただきたい。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要の関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	アセスメントツールとして「センター方式」を採用しており、ユニットの職員全員が一人ひとりの入居者の情報を記入し、ユニット長がアセスメントをまとめるという方法をとっている。多くの職員がアセスメントに関わることで、多面的な情報が集まり、施設サービス計画（介護計画）に奥行きを与えている。		センター方式のアセスメントの中には、生活リズムや生活パターンを継続的に記録するシートがあるが、これを分析することにより、転倒の危険性のある時間帯を把握し、予防に生かす取り組みがなされた事例がある。センター方式でのアセスメントは、入居者全員について完成しているわけではないので、なお一層の努力が求められる。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要の関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	入居者一人ひとりの様子や日々の変化を、ケアプラン内とケアプラン外に分けて具体的に記録している。ケアプランに関わる細かな変化については、付箋にメモ書きしケアプランに貼付しておき、職員が情報を共有し検討したうえで新たな施設サービス計画に反映させている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	管理者が看護師であることから、医療機関との連携がスムーズであり、入居者や家族が安心して入院・通院治療ができる。また、本人や家族の要望に応じて、葬儀や法事への参列支援や、お墓参り、小旅行など事業所独自の自主サービスを行っている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に希望の医療機関を確認し、家族とかかりつけ医を受診、職員の介助で併設医院へ受診、歯科医の往診など適切に医療を受けられるよう支援している。受診マニュアルがあり医療機関への職員対応がスムーズにできている。また入院先や退居先へは家族承諾の上本人の情報提供を行い、連携して継続した医療が出来るよう努めている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居見学时に看取りケアの提供や今までの事例を説明し、心肺蘇生、延命治療等終末期のあり方について利用者、家族等の意向を確認し「医療に関する事項」として情報を書面に残している。癌末期の利用者の看取りを管理者（看護師）が中心になって行い、ホームで他の入居者、職員でお別れの儀式を済ませて、本人の遺志により献体した事例がある。また重度化した場合に特養を希望する入居者へは継続した医療が受けられるよう支援している。		重度化したり、終末期になっても、希望に応じてホームで看取りをすることもあるが、グループホームでの暮らしを続けることが困難と判断した場合には、次のサービスの紹介と退所に向けた支援を行っている。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員の入居者への言葉かけや接し方はさりげなく、呼び名も「〇さん」と呼んでいる。入居時に、利用者と利用代理人は秘密保持、個人情報の取り扱いについて管理者から説明を受けて理解、納得したうえで「秘密保持についての同意書」に署名、捺印している。個人情報の書類関係は施錠できる場所に保管している。		同意書の中の一定の条件の下での個人情報の提供に関して、介護保険サービスの質の向上の為の提供例には外部評価調査も含まれるので、条文に記載されることが望まれる。
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者のペースに合わせてゆったりと生活している様子がうかがえる。訪問日にも3組の家族が訪れて本人と食事に出かける姿がみられた。しかし、職員側からは、申し送り時等人員の少ない時やケア技術の習熟度によって、個別の対応が難しい時があるとの意見がでている。	○	「その人らしい暮らしの支援」は、両ユニットに共通の理念であるが、職員は人員不足やケア技術の習熟度によって、十分には対応できないこともあるとしている。職員同士の工夫や外部研修、OJT（職場内研修）などにより、互いを啓発し、能力の向上を図り、利用者の希望にそってその日の暮らしを支援することが望まれる。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼食のメニューは入居者と相談して決め、冷蔵庫の中の在庫確認をしてから職員と希望者が順番にホーム前のスーパーに食材の買い物に行く。ホームの畑から収穫された野菜が食材となることもある。調理、盛り付け、配膳、片付け、食器洗いなどの作業を入居者個々の力に応じて職員が声かけや会話をしながら一緒に楽しそうに行っていた。検食のため職員1名が入居者と一緒に食事をし、他の職員はさり気なく見守りや介助をしている。また馴染みの食器が話題になり思い出に繋がっている事がある。		昼食時や片付けのときに食べたい物について話題にしたりして希望を把握している。利用者同士お互いに気遣ったり、職員のさり気ない見守りや介助で落ち着いて食事を楽しんでいる雰囲気が感じられたので、今後も継続していただきたい。
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	浴室前には、「今日のお風呂は〇〇湯です」と表示されて入浴したくなるような工夫が感じられる。入浴時間帯は基本的には15:30～22:00だが、希望があれば深夜を除きいつでも入浴できる。一方のユニットでは、1時間以上入浴する利用者が複数いて就寝まえの入浴希望に添えない状況がある。	○	職員は利用者の希望時間の入浴支援には、ユニット間の協力をしているが、今後は更に検討、工夫が求められる。
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	定期的に公民館の習い事へ出かける方、週末に競馬新聞を購入する方、職員との将棋、家族との外出、支援を受けてのお墓参りや遠出、散歩、歌や音楽鑑賞、毎日の調理が楽しみな方、洗濯物たたみが好きな方等々、ホーム各ユニットで掲げている理念に沿って、入居者の役割、楽しみごと、気晴らしの支援が実践されている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	天候や入居者の気分、希望に応じて散歩や昼食の買い物に外出している。近隣の散歩では入居者の馴染みの方から声をかけられておしゃべりをする場面もある。家族から外出の機会を増やして欲しいという声もあるが、職員は人手不足により日常的には希望に添った外出支援が出来ていないことを認識している。	○	職員配置の関係で希望に添えないときは時間をずらしたり、日程を変えたりして約束に応じている。行事計画による利用者の遠出希望など定期的な取り組みとあわせて、「その日の希望」にそった個別の外出支援も期待する。
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	夜間は防犯上玄関は施錠しているが、日中は開所時から鍵をかけたことはない。居室も内側からの施錠なので行動制限はされない。離設対策に玄関ドアベルを大きくしたり、職員間での声の掛け合い、見守りで鍵をかけないケアに取り組んでいる。		運営推進会議で離設時の捜査のお願いや徘徊SOSネットワーク作りについての話し合いが予定されている。また開所時から日中鍵をかけたことがなく、今後も地域の協力も得て入居者の自由な暮らしの支援を継続してほしい。
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	独自の火災、地震、災害時対応マニュアルがあり、定期的に入居者とともに訓練を行っており、非常用食糧、備品の備蓄もしている。しかし、まだ地域の協力体制が整っていない。	○	散歩、買い物、敬老会、地域のまつり、盆踊り、りんご狩りなどで地域の人々との繋がりが出来つつある。運営推進会議で災害対策がテーマに予定されているので、自治会を通して参加と協力を働きかけ、地域住民と一緒に災害時避難訓練が出来よう今後の取り組みに期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	昼食は職員と入居者が相談し、朝・夕食は栄養士の資格をもつ事務員が栄養バランスを考慮して献立をつくっている。一人ひとりの飲食物の好み、苦手な物、嚥下の状態、健康状態を把握しており、摂取量が低下している入居者へは好物を中心に提供して、必要な栄養摂取確保の支援をしている。それぞれの摂取量はケア記録に記載している。また好きな時にお茶などが飲めるように、電気ポットとともに昔ながらのポットも置いている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木造平屋造りの玄関周りは花が飾られ、テーブルと椅子が置かれて談話できるよう設えてある。大切に育てられた鉢植えの季節の花々や鈴虫の音色は季節を感じることが出来、両ユニットから行き来できる口の字型の中庭デッキにもテーブルと椅子があり、日当たりがよく布団が干されていて生活観が感じられる。居間にはテーブルと椅子、ソファ、畳（冬はこたつ）コーナーがあり、中庭に面しているため日当たりのよいスペースとなっている。外の畑近くには陽射し除けとベンチがありナスを収穫する入居者の姿も見られた。		両ユニットの玄関入り口が同じ空間にあり、困らないよう工夫、検討が必要であることを事業所は認識しているので、今後の取り組みを期待する。
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、認知症ケアにおいてはホームが自宅の延長としてその人らしく暮らすために馴染みのものが重要であることを伝え、使い慣れた家具（タンス、仏壇、テーブル）や生活用品、装飾品等を持ち込んでもらっている。家での配置を参考にして居室レイアウトをしたり、自宅からの引越しの手伝いが必要であれば職員が家族と一緒にお手伝いしたりすることもある。		